

# 舞踊作品における反復とその差異

ーパリ国立オペラ座バレエ団の  
レパートリー伝承についてー

安田 静

## 〈研究目的〉

レパートリー制のバレエ団においてテキスト（舞踊譜）なしでバレエの作品が再現・上演されるとき、その反復はいかなる差異を生むのか、またその差異は作品の同一性、作品の上演権・著作権、あるいは作品の本質の伝承、といった観点からみてどのような問題をはらむのかを明らかにする。

## 〈研究対象〉

パリ国立オペラ座バレエ団（以下、オペラ座バレエ団と略）のレパートリーが考察の対象となる。このカンパニーは、ロマンチック・バレエから今日の振付家の作品まで、幅広いレパートリーを擁するが、振付家を芸術監督として迎えていないために抱える問題も少なくない。フランクフルト・バレエ団（ウィリアム・フォーサイス）やブッパータル舞踊団（ピナ・バウシュ）のように、振付家自身が芸術監督を務めているカンパニーの例と比較しつつ、作品の伝承と保存について考察する。

## 〈研究結果及び考察〉

### 「レパートリー」について

新プッチ・ロベール（1993年）の定義によれば、レパートリー（répertoire）とは「劇場の基盤となり、再演しうるような戯曲、作品のリスト」である。従って、本来ならばいつでも再演・上演可能な作品であるべきなのだが、オペラ座バレエ団のレパートリーに入っても、実際には上演権の期限が切れているものもある。例えば、1997年6月にオペラ座バレエ団のレパートリーに入ったピナ・バウシュの『春の祭典』の上演権は5年間に限定されており、以降はレパートリーに含まれてはいても、上演権がなくなる。つまり、オペラ座バレエ団のレパートリーが幅広い、とはいっても、実際に上演可能な演目は十年二十年という時が経つに連れて次々に入れ替わるのだ。

### レパートリー制のバレエ団における「作品」

ところで、佐々木健一が『作品の哲学』や『美学辞典』で繰り返し取りあげているとおり、芸術作品の概念や自立性は、物的実在を持つとある造形美術や、楽譜という拠り所を持つ音楽といった分野においてすら自明のものではなく、また、それについて論じられるようになったのも近年のことである。さらに、ジョン・ケージのパフォーマンスの概念や、ロラン・バルトのテキストの概念、そしてウンベルト・エーコの「開かれた作品」の概念など、今日では十九世紀的な「作品」とい

う概念には様々な揺さぶりがかけられている。

しかしながら、レパートリー制のバレエ団の場合、その「レパートリー」の中に入ることができるのは、まさにこうした「開かれた作品」としてあるべき二十世紀の芸術の姿からはかけ離れた、固着した「作品」だけなのである。これがレパートリー制のバレエ団の大きな問題点である。

### 反復において最も重要な本質とは何か

解釈は作品を構成する不可欠の要素だと考え、作品を「志向の対象」と規定したインガルデンの概念をあげるまでもなく、パリの観客の多くは、同じ作品でも配役によってその解釈や現れが大きく異なることを知っている。ただし、「作品」として一旦固定化した振付は、勝手にバレエ団で改編・改ざんしたりはできないから、テキストが不在でもレパートリー化されることによって、「振付」の部分は、忠実に保存されることになる。

しかし、「振付」は作品の基盤とはなっても作品の本質そのものではないから、レパートリー化によって作品の保存と伝承が完全に保証されるわけではない。とりわけピナ・バウシュやフォーサイスの作品は、本来ならば微細なものから構造上の大きな変更まで、上演毎の様々な調整が前提となっている。彼らの作品はもともと、作品を固定化させて反復上演する、という「レパートリー」の制度とは相いれない存在である。

即興に重きをおいたフォーサイスの作品では上演毎に振付上の大きな差異が生じているから、一見、作品の同一性が脅かされているようだが、振付や作品構成の技法そのものが常に振付家本人によって管理、監督されているので、表面的な差異は作品の本質をいささかも侵さない。一方、オペラ座バレエ団は振付は遵守するが、振付家の監督下にはない作品は、初演時の生彩を徐々に失う。

レパートリー化によって振付が的確に保存される反面、こうした弊害もあることをオペラ座バレエ団が自覚しているからこそ、毎年必ず新作を創作・上演して、形骸化した作品の反復上演に陥らないようレパートリーを構成しているのである。

### 〈参考文献〉（出版年順）

Ballet de l'Opéra National de Paris, Lander / Robbins / Forsythe, Paris, juin 1994.

… , George Balanchine, Antony Tudor, Pina Bausch, Paris, juin 1997.

ジル・ドゥルーズ、財津理訳、『差異と反復』（Différence et répétition, PUF, Paris, 1968）、河出書房新社、1992年。

ウンベルト・エーコ、篠原資明・和田忠彦共訳、『開かれた作品』（Opera Aperta, Bompiani, Milano, 1967）、青土社、1984年。

本研究は文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である。（日本学術振興会特別研究員）